

何でもありということ

江崎保男

何を書いてもよいという注文ほどむずかしい注文はないということにあらためて気が付いた次第である。そこで、「何でもあり」ということから話を始めたい。というのは、現在私が勤めている博物館のことである。

博物館はいろいろな意味で「何でもあり」なのである。それは「モノ（資料・標本）がそろっている」という意味で「何でもあり」だということにとどまらず、機能的にも「資料収集・展示・調査研究・教育普及」という具合に「何でもあり」なのである。博物館という名称のもとに、性格の異なったさまざまな施設が存在するという意味でも「何でもあり」だといえるかもしれない。

どの世界、どの分野でもたいてい「何でもあり」がそれだけで大いなる価値を有していた時代があったようだ。19世紀以前の博物学しかり、そして2、30年ほど前の、まだ百貨店とよんでいたころのデパートしかりである。いずれも、真の意味ですべてをとりそろえることが幻想にすぎないこと、あるいはすべてをとりそろえることが個々の質を保障することとトレードオフの関係にあることが明白となったときに、時代の要求にこたえられなくなり、専門化あるいは「何にもなし」の中での個性を強調する道をたどることになった。これらの例は、「何でもあり」は「何でもあし」に通じる危険性を常にはらんでいるという警告とみることができる。

博物館に勤めるようになって、地元の研究者や野鳥の会の方々とお付き合いさせていただく機会がとみに増えることとなったが、そんな中で強く感じるのがこれらの方々の研究や自然保



巻頭言

護に対する潜在的な意欲とエネルギー、そして博物館への強い期待である。博物館は人とモノと情報を備え、かつ社会に門戸を開いた研究交流・教育の場としての役割を担っているのである。

博物館あるいは博物館に身を置く研究者はこのような役割と期待にどうこたえていくべきなのだろうか。私自身は研究活動を中心にすえ、これとの有機的な関わりの中で博物館の他の諸機能を位置づけることがひとつのやり方であると考えている。特に、教育＝研究の一般社会への還元（役に立つ・立たないより、むしろ価値観の変革をもたらすような働きかけ）は自然科学の分野ではかなり立ち後れているといわざるをえず、かつ大学は少なくとも現在はその任にないようであって、現代の博物館が担うべき重要な役割であると考えている。「何でもあり」の中で柱となるものを選び出し、これに構造をあたえることで「何でもあり」に新たな価値を見いだせるのではないかというわけである。むしろ、博物館の柱となりうるものが研究以外にないというつもりは毛頭ないし、そう決めつけるのは暴論というものだろう。むしろ、いろいろある方がより健全な「何でもあり」に違いない。

さて、鳥学会もかなりの程度に「何でもあり」ではなかろうか。鳥類学（鳥学）そのものが鳥類を材料とした生物学のさまざまな分野の「何でもあり」であるし（少なくとも私はそう考えている）、学会を構成する人々の種類と目的も、先頃のこの欄で示された議論から明らかかなように、他の学会に比べてかなりの程度に「何でもあり」だと考えられる。「何でもあり学会の健全な発展とは何か？」という命題にいどんでみる必要があるそうだが、これはどうも一筋縄ではいきそうもない。ただし、上で述べた「諸機能間の有機的な関わり」の部分だけはそのまま使えそうな気がしている。

関連学術集会（1992）

- ◆ 8月17～22日 国際行動生態学会議（Princeton、アメリカ）
- ◆ 8月22～23日 第3回オオタカシンポジウム（栃木県西那須野：本号）
- ◆ 8月30日 カラスのシンポジウム（千葉県親水広場：no.43）
- ◆ 9月1～3日 生物界における安定同位体に関する国際シンポジウム（三菱化成：no.42）
- ◆ 9月13～17日 第5回鳥類内分分泌学シンポジウム（Edinburgh: no.43）
- ◆ 9月20日 都市鳥研究会シンポジウム（すみだ産業会館：本号）
- ◆ 9月22～23日 生態学研究センターシンポ“動物による種子散布”（京都：本号）
- ◆ 10月7～9日 日本動物学会第63回大会（仙台国際センター：no.43）
- ◆ 11月22～23日 日本鳥学会大会（大阪市大教養部：no.43 & 本号）
- ◆ 12月1～3日 第11回日本動物行動学会大会（つくば：科学技術庁研究交流センター）
- ◆ 12月9～10日 第15回極域生物シンポジウム（国立極地研究所：本号）

（1993）

- ◆ 9月1～9日 第23回国際行動学会議（Torremolinos：スペイン）

（1st circular が届いています。ご入用の方は編集部まで御一報下さい。）

関連分野の学会大会・シンポに関する情報をお知らせ下さい。

第15回極域生物シンポジウム（主催：国立極地研究所）

日時：1992年12月9日（休）・10日（休）

場所：国立極地研究所講堂（〒173 板橋区加賀1-9-10、JR 埼京線板橋駅より徒歩15分）

9日の午前は「極域陸上生態系におけるモニタリング」、10日の午前は「海洋生態学におけるニューテクノロジー」の両シンポが予定されています。午後は両日もポスターによる一般発表があります（問い合わせは、国立極地研究所、03-3962-4711、内368）。

熱帯林の鳥類群集を

永田 尚志

昨年10月より、つくば市にある環境庁国立環境研究所に就職しました。鳥学ニュースNo.36の藤岡氏の「みんなでつくばをかき回そう！」という誘いによって、昨年5月から住み慣れた九州を離れてつくばでOD生活を始めたのですが、トントン拍子に話が進み職を得ることができました。九州大学での大学院時代、励まし、ご支援をいただいた多くの会員の方々にこの場をお借りして感謝いたします。

さて、私の新しい所属先は環境庁国立環境研究所・地球環境研究グループ・野生生物保全研究チームと非常に長ったらしい名前の研究室です。前身は国立公害研究所で、環境庁が地球環境問題に対応するために組織換えを一昨年の7月に行ない、改名して再出発したのが国立環境研究所です。野生生物保全研究チームも、一昨年の7月に新しく誕生した研究室で、現在スタッフは私を含めて4人います。室長は、昆虫の行動生態学者の椿宜高氏で、各スタッフの研究テーマも、水生昆虫(やご)・植物の対捕食者戦略・トンボの繁殖戦略と多様性に富んでいます。当研究室で、現在、地球環境研究の一環として取り組んでいるプロジェクトは熱帯林の減少に関する研

究でして、マレーシアのバソ森林保護区・バングソン森林保護区に調査地を設けて、シロアリ群集、糞虫群集、フタバガキの種子を利用する昆虫群集等の調査を行なっています。私も、マレーシア半島の熱帯林において熱帯鳥類群集の調査を開始したところです。マレーシアの熱帯林は予想していた以上に暗く、鳥の姿を確認出来ず、てこずってはいますが、多くの近縁種が同所的に生息していて面白そうです。現在、チメドリとヒヨドリの2つのグループにターゲットを絞って、これらのギルド構造が森林の攪乱の程度でどのように変化するかを明らかにしようと計画しています。いずれ近いうちに鳥学会大会で発表できると思います。

熱帯林の調査は研究室としてのノルマですが、大学時代から調査してきたウチヤマシマセンニューの研究の延長として、隔離個体群の遺伝構造、ウグイス亜科の社会制の進化などにも興味をもっています。さいわい、つくばの近くには、ウチヤマシマセンニューと同じく不連続分布を示すオオセッカが生息していますので、とりあえず、ここ数年は、Warblerに固執して研究を進めていきたいと思っています。

飛びます！ 飛びます！

日野 輝 明

もがきながらもなんとかはばたき続けてきた北海道大学での長い学生生活に終止符を打ち、この4月よりつくばの農林水産省森林総合研究所鳥獣生態研究室というハビタットで新たに「飛び立つ」ことになりました。お世話になった多くの方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。

今も昔もはばたきながら飛ぶ先に見ているものは複雑なる鳥類群集の構造とその生態。真冬の北海道で1羽1羽個体識別したカラ類やキツツキ類の混群を追跡したり、また林内アカロア(ニュージーランド)にて、左から
石田・日野・永田・上田



特集：飛び立つ

に組まれた高さ15mのやぐらの上で鳥の餌資源としての樹冠内の昆虫類の分布様式を調べたりと、これまでは頭よりもっぱら体力で勝負といった研究を行ってきた私ではありますが、新しい研究室の自由で明るい雰囲気の中かで今後もしばらくは鳥類群集という標的に向かって力まかせにはばたいたいと思っております。そのためにはまず腰を落ち着

けてじっくりと研究のできる調査フィールドを見つけること、これがフィールドに恵まれた北海道で研究してきた私にとって当面の切実な課題となりそうです。

とりあえずこの1年は少し羽を休め、学位論文を投稿論文に直したり未整理のデータをまとめたりしながら、次なる飛翔計画を練ることに専心したいと思っております。

書評

「神奈川の鳥 1986～91」

(B5版 440p. +20pl. 日本野鳥の会神奈川支部発行. 3,000円)

「地方鳥類誌も新しい段階に入った」このたび発行された「神奈川の鳥1986～91」を手にしてまずそんな思いがした。この本では県内で記録された鳥の概説とデータとともに、全県を細分(メッシュ)化し、メッシュごとの繁殖の有無や生息頻度を記号化してプロットした地図がつけられている。その結果、繁殖期と越冬期の種ごとの生息状況がひとめでわかるようになっている。類書としては、いままでに「愛知の野鳥」(332p. 1983年・県発行)や「山口県版鳥類繁殖地図調査報告書」(337p. 1990年・日本野鳥の会県支部発行)などがある。どちらも県内を方眼メッシュに区切って、種ごとに繁殖ランクや密度などをプロットしたもので、全国の範となるものである。

本書はそれらより後発ということと、6年前にこの前身の「神奈川の鳥1977～86」を発行しているだけに、さまざまな点で工夫がこらされている。そのなかで特徴的なものとしては、観察データの細分化で、繁殖や囀りなどの一般的な区分のほかに、「異争」=異種間の争い、「手入」=羽つくろい/頭かき/伸び/くちばしふき、「事故」=事故/死傷鳥などとタイトルをつけて分類されていて、その鳥の生息状況や生態の一部をかいまみることができておもしろい。また巻末にまとめられている「行動別索引」は興味ある方向性をしめしている。ここでは、たとえば「巣材の横取り」という項目には、「スズメがシジュウカラの巣箱から」とか「ムクドリが他の巣から」という、一見とりとめのない、まとめようがないような観察記録が記載されているが、これらの情報が数多く累積されれば、それだけで学術的な貢献ができると思われる。とくに今日のコンピュータの普及と野鳥観察者の増加を考えると、この種の作業が全国的に定常化すれば、記録のデータベース化によって、現時点では夢である日本産鳥類のハンドブック作成時には威力を発揮すると思われる。本書は、わが国におけるアマチュアによる良質の成果が満載されていて、全国の同好の研究者にとって一見の価値のあるものにできあがっている。

〈入手方法〉郵便振替で、「横浜9-14993 日本野鳥の会神奈川支部」で郵送料とも 3,310円を振り込んでください。(川内 博)

都市鳥研究会シンポジウム「都会のツバメはなぜ減少したか？」

日時：1992年9月20日(日) 13～17時(12時30分受付開始)

場所：すみだ産業会館(JR 錦糸町駅前)

都会からツバメがどれほど減少しているのか、唐沢孝一、川内博、越川重治、金子凱彦、山根茂生、他数名の講演者が各地のツバメの現状を発表します。参加申し込みはハガキに住所・氏名・電話を記入して川内博(〒351-01和光市本町31-16-901)まで。

International Symposium on Environmental Approaches to Ornithologyに参加して

中村 司

1991年11月27日から12月1日までインドのスリナガルにおいて表記(鳥類学における環境的要因及びホルモン研究)の国際シンポジウムが開かれた。この会はアジア・オセアニア比較内分泌学会(会長石居進教授)のサテライトシンポジウムとして開かれ、タブリアル博士が名誉会長となり地元ガーワル大学のチャンドラサクランニ博士が事務局長となり事実上コンビーナーとして会が集められた。組織委員はボック教授、ピノウスキ博士、和田勝教授ら12名であった。

各テーマとしてはfeeding, ecology, agricultural ornithology, environmental conservation, evolutionary biology, reproduction, migration, habitat ecology, rhythmなど多岐にわたる分野の発表がおこなわれた。日本からは石居進氏(早稲田大学)、和田勝氏(東京医科歯科大学)、林眞治氏(東京都神経科学総合研究所)、筒井和義氏(神戸大学)、酒井秀嗣氏(日本大学)、大島五紀氏(塩野義製薬ラボラトリーズ)、小藤弘美氏(奈良女子

大学)らが、また小生は伊藤・山口・窪川・石居(早稲田大学)と共同発表させて頂いた。

インドの訪問は初めてであり、鳥も目新しいものばかりであり、デラドゥーンの飛行場に降りるや銃を持った兵士を見てやや緊張するなか、ふわふわ飛ぶヤツガシラやホンセイインコを目撃し興味深々たるものがあった。このシンポジウムではバードウォッチングも企画され鳥学者にとっては楽しく有意義なものであった。

会期中、和田先生と菊地さん(早稲田大学)と共に早朝バードウォッチングを行いイエガラス、ヤブチメドリ、ハシブトガラス、シリアカヒヨドリ、ヤツガシラ、アオショウビン、ヤマセミ、ヒロサンショウクイその他30種近くの鳥を観察しスリナガル滞在中約40種の鳥を記録した。

終わりにこのシンポジウムの国際組織委員としての参加を呼びかけて下さったサクランニ博士と今回多々ご指導賜った石居進先生に感謝申し上げる次第である。

生態学会(名古屋大会)印象記

藤田 剛

今回初めて参加した日本生態学会大会には、仕事の都合もあり、3日間のうち0.7日分しか参加できず、十分に機会をいかせなかった。そんな偏ったサンプルに基づいたものだが、初めて参加した私なりの生態学会の印象をのべたいと思う。まだ生態学会に参加されたことのない方々のために……。

私のような新人にとって、学会に参加して得られる最大の利益は、自分の研究を広く宣伝できることである。生態学会で講演発表することは、さまざまな材料をあつかう研究者に、自分の研究を紹介することができる、という利点があった。私の発表の場合も、植物から昆虫、霊長類まで、さまざまな分類群の研究者の顔を見ながら話すことができた。

ただし、講演発表の場合、発表への指摘を正確に理解するためには、その人の顔を覚え

ておき、講演終了後、あわててその人を捕まえて自己紹介と議論をしなければならない。そうしないと、同じテーマに興味をもつ研究者と知り合いになる機会も逃がしてしまう。この欠点を補うのはポスター発表だろう。しかし、残念ながら、今回の生態学会では、ポスター発表の場が設けられていなかった。この点で、生態学会は、顔見知りの研究者の少ない新人向きとは言えなかった。

生態学会のもうひとつの面白さは、共通のテーマについて対象とするさまざまな生物の視点から出された意見を、交換したり、戦わせりする場があることだった。出席できなかったが、生活史の進化をテーマとしたシンポジウムや、種子散布に関する自由集会などは、その典型的な例だと思う。私も鳥以外の対象をあつかう何人かの研究者と話してみ、改

若手インタビュー

めて、「鳥屋」の長所と短所を考えることができた。

まだ鳥学会しか参加していない新人の方たちには、生態学会に限らず、対象の生物にと

若手インタビュー(5)

—— 前田 琢さん ——

前田琢氏は、東京農工大学・野生動物管理学講座(丸山直樹助教授)で、ドクターコースに在籍している若手研究者である。

前田氏とは、月に一度、立教大学で行われている通称「鳥セミ」という勉強会で顔を合わせてきたのであるが、実のところ、トーストのようにこんがり日焼けした甘いマスクに見とれていて、その研究内容について深く追求したことがなかった。というより、前田氏は、いつも一步控えたところがあって、ご自分の研究も薄いベールに包んでいてなかなか披露して下さらないのである。そこで今回ご登場願うことにした。

研究の関心は、「自然を排除するばかりだったこれまでの都市づくりにかえて、人と鳥の共存できる都市環境の創造・保全のために、鳥類群集と都市環境の関係を明らかにしていくこと」にあるという。最近出た論文『タスマニア州ホバート市における初秋の都市鳥類群集(山階鳥研報; 22巻1号)』では、タスマニアの9ヶ所の林で調査を行ない、都市地域ほど移入種が多いことを指摘している。

フィールドは東京都多摩地区や埼玉県南部

らわれない多くの学会にも、参加されることお勧めしたい。それは、今の日本の鳥学を進歩させるためにも、必要なことだと思っている。



を中心とした地域で、修論では、この地域に分布する都市林の群集と環境要因の関係を解析、博士論文では、住宅地から森林まで、都市にみられる様々な環境を網羅し、群集に影響する要因をより詳しく解析しようと試みている。

そして、「都市の構造と鳥類の種構成等がどのように対応するのかを調べ、緑地設計や都市計画に役立つような研究をしていきたい」と熱っぽく語ってくれた。

快適な居住空間を設計したり、創出していくために、今や野生動物、殊に野鳥が棲むということが一つの重要なファクターになりつつある。こうした時代の要請の中で、その地域にとって望ましい鳥類相を検討したり、誘致する上で、前田氏の研究が大きく社会に貢献していくことを期待している。(成)

生態学研究センターシンポジウム “動物による種子散布”

上記のシンポジウムが9月22~23日に京都(京大会館:京都市左京区)で開かれます。これは京大・生態学研究センターの公募研究会として開かれるもので、一般にも公開されます。22日は午後からシンポジウム、夜に懇親会、23日は朝10時から昼食をはきんで、午後3時までを予定しています。1日目は鳥と液果(漿果)の問題を、2日目はカケス・げっ歯類などによるドングリ類の散布の問題を取り上げます。鳥と木の実の問題は、身近な話題でありながらこれまで本格的に取り上げられることのなかった分野です。参加を希望される方は下記までご連絡下さい。詳しい案内を差し上げます。上田恵介・野間直彦
問い合わせ先: 〒606-01 京都市左京区北白川西町 京大・生態学研究センター・植物生態
野間直彦 (075-753-4251) Fax 4253

日本鳥学会員近畿地区懇談会の近況

当懇談会の活動も15年目に入りました。この2年間の例会の様子をお知らせします。

第38回例会 1990年3月18日、伊丹市中央公民館、参加22名。

1. マダガスカルの鳥(山岸哲氏)；2. ダルマエナガの社会(金昌會氏)；3. コミミズクのペリットについて《標本供覧》(中川宗孝氏・川端睦治氏)。

第39回例会 1990年7月28～29日、福井県自然保護センター、参加29名(北陸鳥学懇談会と合同)。

1. ハヤブサの生活《スライド》(松村俊幸氏)；2. セグロセキレイの子育てと社会構造：調査方法を中心に(大迫義人氏)；3. 菅湖におけるカモ類の渡来状況(小嶋明男氏)；4. 福井県における鳥類の経年変化(林武雄氏)。

第40回例会 1990年12月16日、大阪市立大学理学部、参加22名。

1. オナガの協同繁殖(原田俊司氏)；2. 林縁部のエナガの社会構造の特質(上野吉雄氏)。

第41回例会 1991年3月21日、神戸市立王子

動物園、参加24名。

1. コアジサシの音声による親子認知(岩瀬成紀氏)；2. 一夫一妻のモズにも浮気はあった：DNA指紋法の結果から(西海功氏)。

第42回例会 1991年9月8日、大阪市立大学理学部、参加14名。

1. 溜池群のサギ類群集(工義尚氏)；2. イソヒヨドリの繁殖期の生息域(清水理氏)；3. 韓国鳥類学会大会の印象(浦野栄一郎氏)。

第43回例会 1991年12月15日、京都大学理学部、参加20名。

1. 照葉樹林の果実と鳥の関係(野間直彦氏)；シール鳥のアゴヒゲペンギンの採餌行動(森貴久氏)；3. オオフラミンゴの亜種間交雑の可能性(吉竹渡氏)。

本会は近畿地区在住の日本鳥学会員を中心に運営され、年3回の例会を開いています。年会費は500円です。新しく鳥学会に入られた方で本会の活動に興味を持たれた方は、事務局までご連絡ください。事務局はこの4月から下記に移りました。〒651-13 神戸市北区藤原台北町4丁目10-16 江崎保男気付。

(浦野栄一郎)

「第3回オオタカ保護シンポジウム」開催のお知らせ

日本野鳥の会栃木県支部とオオタカ保護ネットワークでは、

- (1) 那須野ヶ原におけるオオタカ保護活動の視察と体験。
- (2) オオタカ保護活動やハイタカ属の生態に関する報告・発表。
- (3) ワシタカ保護からみた「絶滅のおそれのある種の保存に関する法律」。

の3点をメインテーマに、各地の保護活動化や研究者間の情報や意見交換も兼ねて、「第3回オオタカ保護シンポジウム」を以下のように2日間に渡って開催いたします。オオタカやワシタカ類の保護・研究に興味を持っている。あるいは携わっている方であれば、どなたでも参加できます。また、1日だけの参加も可能です。多くの方々の参加をお待ちしています。

参加申込：参加御希望の方は、往復葉書に「第3回オオタカ保護シンポジウム」参加希望とお書きになり(参加日程・宿泊の希望の有無も明記)、日本野鳥の会栃木県支部(郵便番号320 栃木県宇都宮市星ヶ丘2-2-10-101)までお申し込みください(発表申込は7月20日、宿泊参加申込は7月末、シンポのみ参加申込は8月10日締切り)。

記

主催：オオタカ保護ネットワーク・日本野鳥の会栃木県支部

後援：(財)日本野鳥の会・日本鳥学会

期日：8月22日(土)・23日(日)

会場：栃木県西那須野町 西那須温泉ホットピア・大鷹の里(宿泊)
三島公民館(シンポジウム)

山階鳥研アラビア湾岸調査に参加して

百瀬 浩

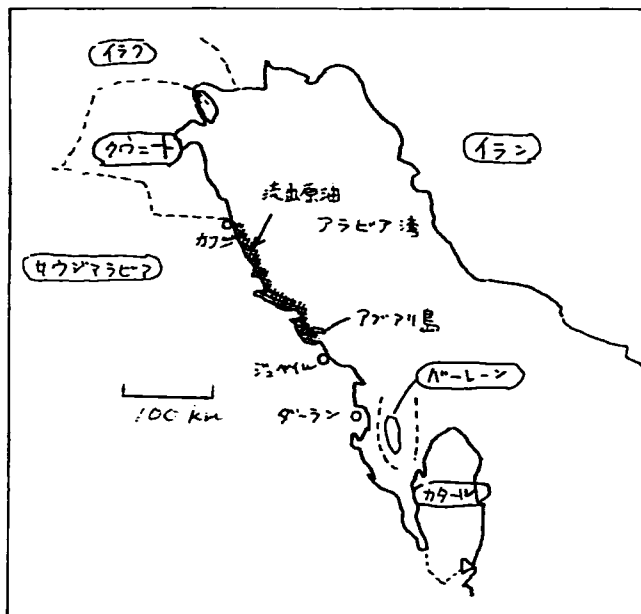
昨年(1991年)の11月から12月にかけてサウジアラビアに行き、湾岸戦争の油流出事故の鳥類に対する影響を調査した。山階鳥類研究所の黒田所長が呼びかけ、トヨタ財団の助成を得て、今回の調査が実現した。サウジのNCWCD(野生生物保護開発委員会)、英国のICBP(国際鳥類保護会議)との共同調査で、山階はシギ・チドリの標識調査を担当した。山階の研究員2名(百瀬浩と百瀬邦和)と、根室で長年シギ・チドリを調査している松尾武芳氏の3名で現地入りした。

サウジ東部湾岸のジュベイル、タルートの2カ所で計30種、1310羽の鳥を捕獲、油の付着状況を調べ、計測、標識、染色後放鳥した。この地域はシギ・チドリ類の重要な越冬、渡り中継地である。主な種類はハマシギ、ヨーロッパトウネン、シロチドリ、サルハマシギ、アカアシシギ、タシギなどで、変わったところではコシギ、オジロトウネン、コアオアシシギ、キリアイなどがとれた。網にはかからなかったが、ソリハシセイタカシギ、オオフラミンゴ、ツクシガモなども多数見られた。

標識調査以外では、サバクヒタキ、サバクムシクイ、カンムリヒバリ、ワシミミズクの砂漠型、フサエリショウノガンなど、砂漠には思ったより多くの鳥がいて驚いた。

調査終了後時間が余ったので、サウジの南西部を視察した。紅海沿岸地域は3000m級の山岳地帯で、アフリカ系の鳥が多かった。シロエリハゲワシ、クロビタイサケイ、オナガニシブッポウソウ、クロヤブコマ、ハイイロコサイチョウ、キロハタオリ等で、海岸ではカニチドリ、ブロンズトキ、クロヅル等が見られた。

帰国後、2月24日に湾岸調査報告会を開き、環境庁や、鳥類関係団体の方々にもお集まり頂き、今後の日本の対応などについて話し合った。サウジには自然保護を推進するための思想的基盤もなく人材も乏しい。色々な面で日本のような外国の支援を期待している。今回の油流出を一つのテストケースとして、鳥類保護の分野での日本の国際協力の体制作りをする必要があるという認識で一致した。国、民間の財団、エキスパート(鳥類調査経験者



アラビア湾岸の略図

や、獣医師など)の方々、それぞれが、何らかの形で国際支援に寄与したいという意向を表明されたが、山階鳥研を始めとする民間団体が先頭に立って計画を進めてほしい、というのが大方の意見であった。山階鳥研は調査に必要な技術、知識は持っているが財政状態は火の車で、職員を長期間派遣する余裕がない。しかし、国や民間の財団、会社などからの支援と、ボランティアとして調査に協力して下さる人達とのパイプ役として、現地との連絡、調査計画の立案などで役立てると思う。

今回のような標識調査は継続しないと意味がないのだが、人材不足がネックとなり、今後同じ形で続けるのは難しい状況である。もし、サウジにボランティアとして鳥の調査に行ってもよいという方がいたら、山階鳥研の



方に連絡してほしい。鳥に関する専門的知識をお持ちの方なら最高だが、そうでない方でもそれなりの貢献ができると思う。また、湾岸調査、および山階鳥研そのものに対する個人、団体からの財政的援助も歓迎する。



私のフィールドアイデア(4)

コアジサシの誘致実験に使っているデコイの作り方

藤田 剛・川崎慎二・川島賢治

集団で繁殖する鳥の中には、巣場所を選ぶとき、とにかく同種の個体が繁殖している場所を選ぶ性質をもつ種があります。アメリカ合衆国などで行なわれている、鳥の模型(デコイ)を設置し、テープレコーダで音声を再生してアジサシなどを誘致する実験は、海鳥などのこの性質に注目して始めたものです。

日本野鳥の会研究センターの樋口広芳さんの発案で、私たちは、1990年から、東京港野鳥公園内で、デコイと音声によるコアジサシ

の誘致実験を行なっています。3年目の今年は、抱卵にまではいたらなかったものの、実験地でコアジサシの交尾や求愛給餌が行なわれ、巣のくぼみと思われる穴をほったりする行動が確認できました。

特に私たち自身が工夫したところはあまりないのですが、ここでは、発泡スチロールを使ったデコイについて紹介します。発泡スチロールは、自然界で分解しにくい石油製品である、という問題点があり、将来は別の材料

フィールドアイデア

を使いたいと思っているのですが、デコイを使った野外実験を計画している方たちの参考になれば、と思い、その作り方などを紹介します。

材料には、発泡スチロールの角材(?)を使いました。少し高価でしたが、東急ハンズで1片数百円程度で購入しました。

角材の表面にコアシサシを真上と真横から見た図(図1)をはりつけるか、その型紙の線を材料の表面に描き写し、その線にそって削って行くのは、木を材料とする場合と同じです。

発泡スチロールを削る道具は、スチロールカッターを使いました。特に削りかすが粉にならない点が良いところです。電熱線の長さ(刃渡り?)は15cmほどの型が使い安く、電池式のものよりは、直接コンセントを電源として使う型の方が、経費も節約でき、切れ味も良いようです。大きな文房具屋で、数千円程度で購入しました。

着色には、文房具屋で購入したリキテック

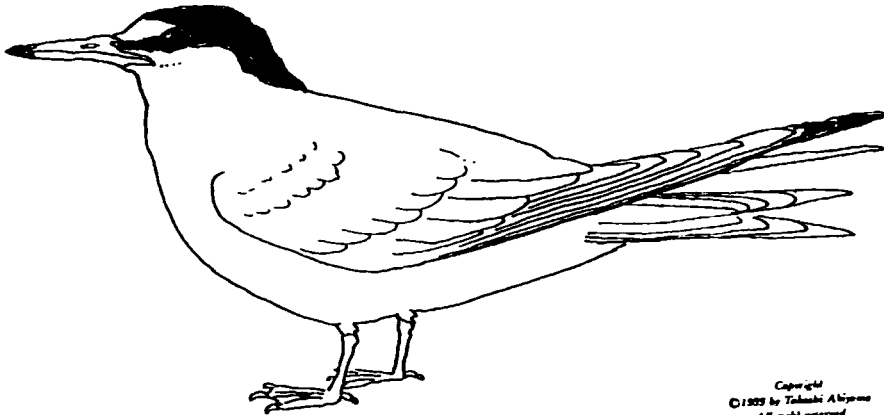
スの絵の具を使いました。2か月間野外に設置してもほとんど色落ちしませんでした。

翼をひろげたような姿勢は、強度の点で問題があるようです。しかし、中に針金を通したり、加工する技術が上がれば、かなりさまざまな姿勢のものも作れるようです。ただし、私たちも、あまりいろいろな姿勢のデコイを作ったことがないので、この点についてはよくわかりません。

野外に設置する際には、風で飛ばされないように、木片にプラスチックのひもを使ってデコイ本体を固定しました。木片もひもも野鳥公園周辺に落ちていたものを使いました。

耐久性がもっとも心配だったのですが、思ったよりも強く、2か月ほど野外に設置したままでも、ほぼ原型のままでした。

デコイについては、私たちの実験も、まだまだ模索段階です。もし、材料などでも何かアイデアがあるようでしたら、ぜひ、お知らせください。



Copyright
©1997 by Takashi Akizawa
All rights reserved

秋山 孝

コアシサシ・デコイの寸法

全長：250～280mm 翼開長：510～525mm

翼長：167～193mm 嘴峰：28～32mm

附蹠：16～18mm 尾長：60～114mm

実験場所

東京港野鳥公園：〒143 東京都大田区東海3-1

鳥学会大阪大会の見どころ・聞きどころ

お手もとに大会案内が届いたことと思いますが、以下にもう少し詳しく本年度大会の内容についていくつかをご説明申し上げます。

●シンポジウム：近時問題になっている熱帯雨林について、鳥との関連を見てみたいと思います。まず、舞台となる熱帯雨林の特徴について、最近パナマから帰られた、昆虫の個体群生態学者中村浩二氏（金沢大学助教授）に話していただきます。ついで、熱帯雨林の象徴であるサイチョウ類の比較生態についてタイ国のピライ・プーンスワッド Pilai Poonswad 女史（マヒドン大学助教授）に発表していただきます。通訳は彼女と永年サイチョウの共同研究をしておられる辻淳夫氏（名城大学助手）を予定しています。最後に熱帯研究の権威、橘川次郎氏（クイーンズランド大学教授）に熱帯の鳥についてまとめていただきます。氏はなぜ熱帯雨林には種類数が多いのか、どんな生態的特徴を持っているのか、森林伐採が続いて fragmentation の度が進めばどんな種が絶滅するかなどをコスタリカ、アマゾン、ニューギニア、オーストラリアでされたお仕事を中心に話され、熱帯雨林の将来とその保護について日本の会員と意見を交換されたいそうです。

●招待講演：韓国鳥学会の設立大会に日本の若手の鳥学者を招待していただいたので、今回は韓国の若手鳥学者を招いて講演をしていただきます。通訳は日本に留学中の金昌會氏（大阪市立大学大学院生）の予定です。

●ビデオ発表：今回は大型スクリーン映写型のビデオ発表が可能です。200人以上が同時に発表を見ることができ、スライドと同じように発表できます。

●講演要旨集：大会に参加できなかった方々からもう少し詳しい要旨集を望まれる声がありました。今回は試しに B 5 版 1 ページを一発表に充て、図や表や写真も掲載可能にしてみました。

●論文作成相談室：編集委員会から論文作成についてどんな些細なことでも気軽に相談できる部屋を用意してくれという要請がありましたので 1 部屋をこれに充てます。大いに有効にご利用下さい。

●一般講演：学会の大会は会員の皆様の一般講演によって支えられていることは言を待ちません。多くの口頭およびポスター発表の申込みを心からお待ち申し上げます。

日本鳥学会1992年度大会、大会準備委員長 山岸 哲

第21回国際鳥学会議の準備状況

第21回国際鳥学会議（IOC）は1994年8月21日～27日にオーストリアのウィーンで開催される。このためのプログラム委員会が昨年8月に開かれ、会議の概略とシンポジウムの題目ならび世話人の大多数が決定された。決定された会議の概要は次のとおりである。

①参加者は 2,500人を見込み、IOCとしては最大規模となる（前回の参加者は 1,303人）。会場は Austria Centre で、メインホールは 4,000人を収容可能。②会長講演と plenary lecture は計10名（各45分、0830-1000）、③シンポジウムは計54題、各シンポジウム 5名

（各人講演20分、討論4分）、（1030～1230、1630～1830）。④一般発表はポスターに限り、口頭発表は行なわないが、口頭による2分以内の紹介が認められる。⑤各種委員会、ラウンドテーブル、映画その他（2000～2200）。

シンポジウムの発表を会議の Proceedings に印刷するか否かがオタワの時以来問題になっており、プログラム委員会はいったんシンポジウムは印刷しないことに決定したが、その後反対意見もあって、現在検討中である。

なお、First Circular の発送は本年12月、一般発表の申込み（要旨送付）は1994年の3月頃締切りとなると予定。

（森岡弘之）

お知らせ

【論文作成相談室の開設】

1992年度大会（大阪市立大学）の会場に論文作成相談室を開設します。論文作成や投稿に関するさまざまな質問・疑問について、編集委員が相談に応じますので、ぜひご利用いただき、学会誌に投稿をお願いいたします。（編集委員会）

【会計幹事から】

1. 会費納入状況表示方法のお知らせ

各会員の会費の納入状況は、学会からの刊行物の発送宛名ラベルに打ち出す仕組みとなっています。宛名ラベルの個人名の下に何も印刷されていない方は、その年度の会費が納入済みです。年会費は5,000円で、前納制となっています。未納または不足の方には“会費未納〔〇〇〇円〕”とその額を表示しています。反対にその年度分を越えて納入された方には、“会費前受分：〇〇〇円”と表示しています。ラベルをよく確認して郵便払込を利用して納入して下さい。特に、会費が端数金額となっている方は、次のお支払いの時に必ず解消して下さい。

なお、皆様が実際に郵便払込をされてからラベルへの入力には2～3週間程度後になり、学会誌やニュースの発送時は、ラベル貼りの作業を先行させるため、1週間程度早くラベルを打ち出します。したがって、ラベルは1ヶ月程度以前の納入状況を表示しているものとなっています。また、会費の領収は払込票（払込局で出されるもの）をもってかえさせていただきます。

2. 谷口一夫氏から4,000円、鳥学基金への御寄付をいただきました。感謝申し上げます。

3. 以下の2件の郵便払込者記名のない入金がありました。

a. 福生の受付局印で学会の名を書いて払込まれた方。金額と払込月日を記入して連絡下さい。

b. 石垣市の方。記入住所、払込局名、金額、払込月日を記入して連絡下さい。（福田道雄）

●『生物科学』（岩波書店）の5月号の特集に、昨年の立教大学で開かれた日本鳥学会大会のシンポジウム「鳥と木の実の共進化」が掲載されています。岡本素治・小南陽亮・上田恵介・守山弘の4氏の論文に加えて、神戸大の湯本貴和さん、北海道道立林試の斎藤新一郎さんにも執筆頂いています。書店で手に入らないときは、1冊1,400円（送料込み）でおわけしますので、振替でお申し込み下さい（振替口座：長野 7-39734 上田恵介）。

●『日本鳥学会誌』への投稿は、

〒305 稲敷郡基崎町松が里1 森林総研・鳥獣生態研究室、松岡茂 宛

●『鳥学ニュース』への投稿は、

原稿はワープロまたは原稿用紙で、1行20字または42字（完全原稿で）。送り先は、

〒171 豊島区西池袋3丁目 立教大学・一般教育・生物、上田恵介 宛

次号（no. 45）の原稿〆切は9月20日、発行は11月1日

編集後記

- ニュースファイル、フィールドアイデアの投稿を待っています。どうか積極的に！（花）
- パンの20卵の巣を見つけてしまった。種内托卵だろうか。一夫多妻だろうか。（K）
- 野田のサギ山は今、何処？ 埼玉県でコロニーを探すのに苦勞してます。（成）
- 狭山丘陵が東京の残土捨て場と化している。なんとかしなくては（O）

鳥学ニュース No.44

1992年8月1日 発行（会員配布）

発行 日本鳥学会

〒169 新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館内（03-3364-2311）

発行人
印刷所

森岡弘之
添田印刷株式会社

編集（幹事）上田恵介・中村一恵
（スタッフ）大塚 聡・花輪伸一・成末雅恵